

〔第9回学術集会会長講演〕

## 家族とともに探索してきて —家族、この不思議で魅力的なるもの—

岩手県立大学看護学部

横田 碧

### はじめに

第9回日本家族看護学会学術集会が、東北の地で初めて開催され、遠い所にもかかわらず、北から南から605名という多くの方が参加されたことに主催地として心より感謝している。

大会長講演としては、「家族」という複雑な生き物を、①「自分自身の家族」②「他者の家族」③「援助する家族」というようには分離せず、事例を織り交せて縦系と横系を組み合わせながら、1枚の織物として総合的に論じてみた。ここでは紙数の関係から事例を簡略化して骨組みのみを述べることにする。

### 1. 家族の理解事始め

#### (1) 家族とは複雑で多様な存在である

(事例1)：社会福祉法人の病院で医療相談係として働き、ガード下の家庭訪問をした時、肌の色が3人3様の子供達との夕食のシーンに出会った。そのほのぼのとした感触は、家族とは「形態」ではない「絆」なのだと感じた。

(事例2)：未熟児で将来障害を持つかも知れないといわれた子供を、“この病院なら裏門から出してくれるのではないか”と暗に相談してきた家族の家庭訪問をした時、「肺炎で亡くなりました」という言葉を耳にした時の衝撃と胸のうずきは今でも忘れられない。

家族看護に従事する場合、家族はととも一筋縄ではいかない、【家族とは複雑で多様な存在である】こと、“どのような家族の存在もあり”とする考えを心

の底から自分のものとする必要がある。

#### (2) 家族の潜在可能性への信頼

(事例3)：職場のメンタルヘルスを担当してまもなくの頃に受療拒否で難渋したケースが、回復後は定期的に月1回の継続相談をしながら、数年の安定状態を維持でき、結婚もし子供も生まれたが、職場の機構改革の折に再発した。妻が「薬を飲んでいたのは知っていたがこんなになるとは知らなかった」と言いつつ同伴してきた。自宅で療養するか入院するかの相談の時、妻のもらした「刃物などは気をつけて見えないところにしまっています」という言葉でその賢明さを感じとり、在宅での注意や緊急時の連絡方法を確認し合った上で、危機状態を自宅で乗り越えることができた。

家族看護に取り組む時には、【家族の中から生まれ出てくる智恵と力の存在への信頼】を自分の中に保持していることが必要である。

#### (3) 家族の潜在可能性を引き出す支援

(事例4)：被毒妄想を抱き、保健所・警察・検察庁などに検査や調査を要求して歩き仕事にならない職員がいたが、なかなか受診にまでは結びつかなかった。毒のために身体の調子が悪いと内科病院に受診したとの情報を入手し、妻とともに精神科への紹介を依頼しに行った。紹介先があればとのことで、調整の上入院可能な精神科を選定した。当日は20歳そこそこの妻が1人でそこまで同伴することになる。途中で何がおこるか分からない。そこで入院予定の病院に下見に行くことにした。道順、受付手続きなど、PSWの親切な案内により妻の不安もやや薄れ、当日は無事入院にまでこぎつけられた。

素人の若い妻の中から、このような行動力が生ま

れ出てきたということは、人間の危機において発揮されてくる【家族のパワーの潜在可能性】と共に、それを引き出す【家族が力を発揮できる安心感への支え】の提供の重要性がある。

(4) 家族の内心の思いへの理解

(事例5)：離島から高卒で上京した女性が寮の下の家の男性達が見ているので眠れないと言い、部屋を変えてみたが体調を崩してしまったとの相談があった。それまでの経験から学んだ方法を総動員して、本人の気持ちも家族調整も万全に行い、入院にまでこぎつけたと思ったケースについて、今考えるとかなり独りよがりだったという反省がある。

家族看護を行う者が一番いいと考えた方法でも、家族の本心をつかんでいたか、自分1人の思い込みで進んでいたのではないか、【家族が“NO”と言える雰囲気醸成】しながら確認をしていたか?と問う必要がある。

2. 家族の関係性への理解とその特徴

(5) 1人1人は良い人でも組み合わせが悪いことがある

(事例6)：自分自身の家族を振り返ってみると、両親夫婦は傍目には良い家族と見えたかもしれない。しかし内心では、良い家族を演じなければと思っていたのかも知れない。子供心には仲良くは感じられなかった。“1人1人は悪い人ではないのに組み合わせが悪いということがあるんだ”と思っていた。

後に家族療法を学んで、【家族の全ての行動は良きものを目指しているのだということへの信頼】と【人々の行動の良い点をサポートし、悪い点には触れずにおく】ということの理解へとつながった。

(6) 家族のメリット・デメリット

(事例7)：子供は親を選べない。生まれ落ちた家族の中で育つという人知を超えた天の配剤がある。私は思春期に「産んで欲しくなかなかった」と言い、我が子にも「誰が産んでくれと頼んだ」と言われた。

“育つ”には家族の“育てる”がなければあり得ない。その過程には意図的か無意図的にかかわらず、結果的にはメリットとなるものとデメリットになるものの両方が入っている。すなわち【人間は同じ環境をメリットにもデメリットにもする力を持っている】ということである。

(7) 家族は両刃の剣（伝えるものと伝わるもの）

(事例8)：「三つ子の魂百までも」と言われるが、親は染めようと意図したわけではないのに、子供は家族の醸し出す雰囲気染まっていき、それが普通のこと、常識だと思ってしまう。私の上3人の姉妹は2才きざみで並んでいる。母の短歌の遺稿集を年代順に追ってみると、姉妹の個性の違いは、その子を育てた時の母親の心境をもろに受け取っていることがわかる。長姉は婦人活動家に、次姉はまともな家庭の主婦に、三女の私は仕事も家庭もほどほどの両立を、となっている。

まだ言葉も分からない幼い時に、親の心の思いを感じとる感受性を子どもは持っているらしい。【親の思いの中で子供は自分の人生を作りあげてくる】のである。

3. 家族関係の偽りと歪み

(8) 良きものがどこでねじれたのか

(事例9)：千葉大学に移ってから、院生が精神神経科児童外来で子供に週1回50分の継続的援助を行っていた。その中で、どうしても母親のカウンセリングをして欲しいという要望があり担当した。姉・弟・母それぞれに担当者がついてしたが、1人1人では良いのだが3人が一緒になると必ずケンカになる家族だった。まさに【コミュニケーションの悪循環のサイクル】がまわっていた。引越しをすることになって終了する時に、母は「先生は、私が子供達と話ずときに、話したら良いような話し方で、私に話してくださいましたね」と述懐した。つまり【良いコミュニケーションのモデルとしての存在】の必要があったということである。

## (9) 家族内コミュニケーションの混乱

(事例10)：実習で、どうしていいか分からなくなり休んでしまった学生がいた。彼女の語るところによると、名家の出の祖母と普通の出身の母(いずれも教員)の間での軋轢がある家庭で生まれ、嫁姑の間には会話が無く、祖母は母の悪口を孫に言い、母は祖母の悪口を娘に言う、そのような嫁姑の暗闘にまきこまれて、自分がどう居れば良いか判らなかつたのだということに気づいた。

コミュニケーションは構造的に【言葉として表現される「内容(コンテンツ)」と、当事者の感情の流れ「文脈(コンテクスト)」の二重構造】をもっている。この両者のズレや不一致が大きいと、人はどちらに反応したらいいのかわからず混乱をきたす。そして、「話を合わせたふりをする」とか“本当の自分の気持ちではないのにそのつもりになってしまう”というように、姑息な手段でつじつまを合わせ取りつくりしてしまう。それでも対応しきれない時には“人とかかわることを止めてしまう”ことになり、孤独になってしまう。このように【コミュニケーション・パターンは家族との繰り返しの中で学習】してくる。これはグレゴリー・ペイトソンのいう「二重拘束」、交流分析でいう「裏面交流」である。こじれてしまった家族内コミュニケーションの理解はこれらの理論によって初めて可能になる。また、コミュニケーションが学習してきたものだとすると、【コミュニケーションは学習し直すことができる可能性をはらんでいる】ということになる。

この方法を「時間軸」と「空間軸」から考えてみる。

## 4. 家族の歴史性・時間軸から

## (10) 悪循環のまわしなおし

(事例11)：「実習でうまくいかなかったケースのうちろに父の姿が見える」と言った学生がいた。そこでゲシュタルトセラピーの【エンプティ・チェア(空のイス)の方法】を活用した。2つのイスを向かい合わせに置き、1つは「自分のイス」もう1つは「父親

イメージのイス」として、幼い時には表現できなかった(しなかつた)思いを言葉にし、かわるがわる対話をしていく。その過程で内面的理解が進みお互いの歩み寄りに至った。

まさに【記憶の中の親イメージとの対話による和解】であった。【現実(事実)としての親と、子どものイメージとなっている親像とはかなり違っている】のである。交流分析の「人生脚本(スクリプト)」にいう“過去と他人は変えられない、しかし、現在と将来は変えられる”ということである。

## (11) 人生脚本の書き直し

(事例12)：私の中年期の課題は、尊敬し慕っていた母親イメージに対して、「縛りやがったな!!」という思いもかけない心の叫びで突破した。

今までメリットと思い込んでいたものの裏にひそかに張りついたデメリットへの気づき、物事の両面が見える広がり、片手落ちではない真の自由の獲得は、【人生脚本は書き直しができる】ことに通じている。

## (12) 自他の中のポヨヨ〜ン膜

(事例13)：実習体験での良かった点を仲間が伝えてもやんわりとはね返され、伝えた人がいつも無力感を感じていたが、お酒の勢いで本心が飛び出した時に仲間から、「今ならあなたの言いたいことが良くわかる」と声があがった。その後「ポヨヨ〜ン膜」の図が描かれた。自他の間には透明な流体の入っている膜があり、他者の意見はそこを通る間に小さくなり中核にまでは届かない。自己の中核は母との間にパイプでつながり、そこから自己の行動や評価は出ている、というものだった。

これは【母子一体の共生関係がいつまでも続いていると、新しい人間関係が結ばなくなる】ことを実証するものであった。

## (13) ゲシュタルトとしての理解

(事例14)：自分1人ではどうしても過去の見方から脱出できない時に、グループの仲間からの異なる見方の提示によって、今までは見えていなかった見方がふと訪れるということが度々起こった。

これは【視点(立場)を変えると異なるものが見えてくる】というゲシュタルトの「図と地の転換」にあたる。

(14) システム論的理解と働きかけ

(事例 15) 息子の不登校を心配して主任の降格を申し出た職員がいた。しかし家庭の混乱は治まらず、娘の暴力、嫁姑の軋轢、うつ状態による本人の休職と、多様な問題が同時に吹き出してきた。長期間の相談により、本人は精神科受診へ、息子は教育相談所へ、娘は児童相談所と児童精神科外来へ、嫁姑との間は2世帯住宅にして老父母との家族内境界の設定と、家族の中ではやや健康度の高い舵取り役の妻と共に、生活全般のカウンセリングを通して心理的サポートをしながら実施してきた。

各システム内、システム間の中で、もつとも【動かしやすいところから社会資源の活用】をしながら、家族成員個々の課題解決を図ると共に、全体の関係を見定めながら、調整・援助を進めていく。1つの家族の問題解決には、各システムにおける成員の課題解

決と共に【システム構成に目を配り、相互関係への働きかけ】をすることが、多問題家族の場合には重要だと痛感している。

(6) 家族関係への理解に立った支援

家族の変化・成長には、親のかかわり方で子どもに影響が及ぶ時期には、親達の学習・行動の変化、つまり【トマス・ゴードンの「親業」の学習】が役に立つ。また大人になってからは交流分析などに基づいた【リペアレンティング(育ちなおし)】という方法が役に立つ。

今後は、種々の理論と方法から学び【看護者が家族に役立つ存在となってゆく】ことが課題となる。

おわりに

家族看護学の基本である【自己理解→他者理解→関係理解】へと歩みを進め、【豊かな心をもって、家族と同伴する】ことを、みんなで歩いて広い道としていきたい。